



コロナ世代なんて呼ばせない！



副会長 今野 徹

今年の夏は、暑い夏でした。今、この原稿を書いているのは、お盆休みの真っ只中で子どもが少ない保育園の屋下がり事務室。最近はお盆期間でもそれほど休む子どもも少なく、賑やかなものなのですが、今年のお盆は特別でした。普段100人以上の子どもが登園し、あちらこちらから楽しげな声が響いている保育園が、ひっそり静まりかえっています。原因は新型コロナウイルス感染症。登園しているのは全体の1/3にも満たない子どもたちのみ。感染してしまったり、濃厚接触者認定されて自宅待機の子も、感染予防のために登園を自粛してくれている子ども、後は普通にお盆休みの子ども…暑い暑い夏の日差しに照らされた、水が入っていないプールが、園庭に寂しく佇んでいる、なんとも言えない2022年の夏でした。皆さんが、この原稿を読んでいる10月。新型コロナの第7波は収まっているでしょうか？収まっていて欲しいです。

コロナ禍となり、既に丸3年以上が経過しました。コロナ禍が始まった2020年の春に入園した0歳児も、もう2歳児。あの年に卒園した子ども達も、もう3年生です。あの年に年少さん（3歳児）だった子どもたちが、今の年長さん（5歳児）です。この子達は、3歳、4歳、5歳という3年間をコロナ禍で過ごすことになりそうです。この間、様々な行事が中止、あるいは内容が変更となったり、日々の活動にも様々な制限が出来てしまったりしました。マスク保育、給食の黙食、クラスや年齢を超えての交流が少なくなったり、調理や食に関する活動も制限を受けたかもしれません。そして、この状態は、まだしばらく終わりそうもありません。秋には運動会や遠足が、冬にはクリスマス会や発表会、年があげれば卒園式が、今年もまだまだ行事が沢山控えていますよね。さあ、今年はどうしましょうか。

実は、この3年間、保育や行事に関しても色々なチャレンジをしてきました。これを読まれている会員園の皆さんのところでも、似たような状況だと思います。感染対策と保育のバランス、行事の目的、行事への保護者参加の是非、などなどなど…今まで以上に、園の職員皆で悩み、考え、工夫を凝らしやってきましたよね、この3年。今までだったら「例年通り」で続けていた様々な事が、「当たり前」だった様々な事が、コロナ禍をきっかけに、一度立ち止まってみて、目的や必要性を考え直す事によって、保育や行事を再構築できた気がしています。うちの園でも、行事について「子ども」「保護者」「保育者」の3つの視点から、それぞれ考えてみようというテーマを職員に与え、皆で考えました。その行事の目的は？その中でも一番大切なポイントは？子どもの自主性とは？などなどなど…。

コロナ禍の3年間は、大変な3年間でした。感染対策を重要視する社会の中で、様々な制限を子どもたちに課さねばならない辛い3年間でした。彼らの成長発達段階において、その影響は小さいものではないかもしれません。でも、我々保育者は、この辛い3年間で得た経験はけっして後ろ向きなものではなく、この我々の試行錯誤は、保育の質の向上に向けた前向きな未来に繋がるものです。そう信じています。

コロナ禍を保育園で過ごした彼らが大人になった時に「コロナ世代」なんて絶対に呼ばせない。そんな祈りとも誓いとも似た思いが溢れてきた、暑い暑い2022年の夏の屋下がりでした。